

(Lonely Night Gathering)

さみしい夜の句会報 第189号 (2024.9.29-2024.10.6)

- ◆ 参加者：しまねこくん、もん、星野響、汐田大輝、ハツカ鈴、石川聡、西脇祥貴、小沢史、平松泥沸、クイスケ、しんいち、西沢葉火、牛田悠貴、吾島羅、上崎、花野玖、古城エツ、宮坂、変哲、しろうも、池田、突波、折戸みおこ、松柏木、奥、かすみ、水の眠り、旨、千春、蔭一郎、雷らいつ、石原とつき、菊池洋、勝、ユミヨシ、まつりべきん、いずみ、鯖虎、何となく短歌、おかもとかも、城水めぐみ、みやこまなつ、みや、靈夢、山野、たみ、うつわ、リンネリンク、片羽、雲雀、塩の司厨長、高岡ちやる、流離するおかん時々オクラちゃん桃瀬、織乃月せんのかき、月波写生(四九名)

◆川柳・俳句

- ◎字詰めでびつたりの夜長 蔭一郎
おりあいを柘榴のつぶつぶでつける 蔭一郎
遠目には蠅近目には秋の蠅 しまねこくん
十月を過ぎてても蠅に逃げられる しまねこくん
女湯と同じ案山子を男湯に しまねこくん
読む人の無きメール来て九月尽 花野玖
朦朧を見たい中島みゆき 西脇祥貴
秋が来て猫もパスタも長い夜 しろうも
車中泊民宿寄りのむしさされ 水の眠り
十月の祖父は時計の中にいる 汐田大輝
湖のそこはかとなく住む白虎 千春
みずいろの付箋を使いきり、橋へ 上崎
うめぼしにすきな指紋といわれたの 小沢史
にゅつぷりと毒親の茎まんじゅしゃげ 石川聡

りんどうと韻を踏めたら高踏派 星野響
あたまいつかい狂わせてから出社 しんいち
音感を四分の一切り落とす 牛田悠貴
逢えたのはキャラメル日和だったから MIVA
なんか冷めてしまった夢が夢になる 平松泥沸

*

二の腕を頼みの綱とする雄牛 もん
サロメだけ欲しい王子の褪せた馬 クイスケ
リリー丸善ドイツ店 西沢葉火
四千の瞳の先を秋の虹 花野玖
正論は高確率でつまらない 宮坂変哲
結末は肩甲骨が知っている しろとも
バーボンと星に流されてあるある 池田突波
怖くないクリーム色の彼岸花 松柏木
実家の墓に入らない梔子の花 菊池洋勝
台所(右図)の角で泣きました まつりぺきん
粘っこい五郎の頬にレモンをぎゅ いずみ
ふたつめの茶碗を取ってすぐ戻し 鯖虎
天晴れな不安が仕込まれてる鏡 おかもとかも
知られてはいけない線のある裸体 城水めぐみ
ネツ友の 十六歳の 少年と 結ばれし 靈夢
後悔をこう書いてみた大航海 うつわ
秋浴衣しまい損ねて芙蓉闇 片羽雲雀
その歌声を焚火のように聴く 雷
櫓田が一匹 櫓田が二匹 塩の司厨長

*

イヌの性器もヒトの性器もオヤシラズ 月波与生

◆ 短歌

薄闇に「ぼっん」「ぼっん」と雨が鳴る 伸ばした手のひらにも「ぼっん」「ユミヨシ」

*

底の方から湧き上がる痛さほら驚くほどに満ち欠け通りハツカ飴

凡人が並びに立てぬ地平行く魂の色果つる時まで 吾意羅白線を踏まないように俯いて肺腑をしぼり生きていこうか古城エツ

雨雲の隙間から光が差してこの地獄にも意味はあるから折戸みおこ

とらないといけない電話だとしてもその傲慢な音が嫌いだ奥 かすみ

「理由は言えないの」ノコギリエイは味方なジャポニカ石原とつき

曇りなき瞳覗けば一刹那きみの心の波形の揺らぎ 何となく短歌

今日詠んだ川柳、俳句です。秋とハロウィンと寄りそい愛みよこまなつ

夜に見る夢はしとしと雨がふる一生動けないよと笑う みや

毒入りの噂話に気をつける感染力が半端ないから 山野たみ

寂しさが二倍増しです秋の夜美味しいもので気を紛らわす リンネリンク

折り紙に誤字の混ざった一茶の句すつと差し出す指の長さよ片羽雲雀

◆ 詩・短文

作品はありません。

◆作品評から

とらないといけない電話だとしてもその傲慢な音が嫌いだ

奥 かすみ

～はじめまして。

すぐく分かります。電話って凶暴ですよ。私も呼び出し音が嫌いになってしまいます。私だけじゃないって少し嬉しくなりました。(山野たみ)

なんか冷めてしまった夢が夢になる 平松泥沸

～眠って見る夢は覚めて夢になり、覚めて見る夢は冷めて夢になる。覚めて夢になる夢と、冷めて夢になる夢は同じようなものなのだろうか、、余韻の長く残る一句でした。

(雷)

あいまいなおもいでならばうつくしい たぶんおそらくきつとめいびー mine

～「たぶんおそらくきつとめいびー」の面白さが作品を支えてるが聞いたこともあるようなフレーズで。諸刃の剣だよなあこれ。(月波与生)

スイスでは鳩をホルンにする季節 汐田大輝

～そんなことはないと思ってもスイスのことを何も知らないし季節によってはそうなのかも知れない。「ホルン」が世間のほんやりとしたスイス感を表している(月波与生)

後悔をこう書いてみた大航海 うつわ

～後悔が大航海となるところに、流れであったり、広が

りを感じました。音としての“こうかい”が三度あると後で気付きましたが、不思議な説得力の一因になっている気がします。(月波与生)

ジミヘンに似ている人の語る夢 雷

「ジミヘンに似ている人」が割と近くにいます。面白い。中崎タツヤの「じみへん」のエピソードのようでもあるし。(月波与生)

来年もカブトムシとかセミとかを見殺しにして誕生日は秋ハツカ飴

「先日集まった人全員が9月生まれでびっくりした。がもう二度と揃わないメンツだろう。秋は忘却の季節。(月波与生)」

知事室を蝕んでいく手毬唄 汐田大輝

「今話題の「知事室」であるがニュース性がなくなっても川柳として立てる普遍性を持っている。(月波与生)」

折り紙に誤字の混ざった一茶の句すつと差し出す指の長さよ 片羽雲雀

「折り紙、誤字、一茶、で子どもを詠んだ句と分かるものを、なぜか艶っぽい句と誤読させられるのも、ある意味一茶の力かもしれません。(花野玖)」

「一茶の句? どんな句か想像して沼に溺れる(織乃月(せん)のつき)」